



NEWSLETTER No.38

Organic Geochemistry

The Japanese Association of Organic Geochemists

日本有機地球化学会

2003.12.10

Reports

第 21 回有機地球化学シンポジウム（札幌シンポジウム）開催される

第 21 回有機地球化学シンポジウム（札幌シンポジウム）は 2003 年 8 月 4～5 日かけて北海道大学百年記念会館にて開催されました。全国から 62 名の参加があり、25 件の口頭発表、17 件のポスター発表が行われ、熱のこもった講演が行われました。懇親会では北海道ならではの新鮮な魚介類が並び会場を大いに盛り上げました。世話人をしていただいた鈴木徳行代表ほか北海道大学の方々にあらためて御礼を申し上げます。



2003 年 8 月 5 日 北海道大学百年記念会館前にて

第21回有機地球化学シンポジウム（札幌シンポジウム） 講演

8月4日（月曜日）

口頭発表

座長 松本公平	
藤根 和穂（東大院理）・山本 正伸（北大地球環境）・南 育絵・多田 隆治（東大院理）	第四紀後期の日本海堆積物から検出された低炭素数アルケノエイト（C _{34:2} EE）
市川豊・山本正伸・大場忠道（北大地球環境）	鹿島沖MD01-2421コアの後期第四紀リグニン組成変動
中塚 武・大西 啓子・原 登志彦（北大低温研）・高橋 耕一（信州大理）・隅田 明洋・白岩 孝行（北大低温研）・立花 義裕（東海大石渡良志（都立大名誉教授）	カムチャッカ・カラマツ年輪セルロースの炭素・酸素同位体比による短周期気候変動解析
	バイカル湖の過去2万年：堆積有機物の起源と湖内一次生産量の変動の推定
座長 早川和秀	
井上源喜・加納涼子・佐藤知香（大妻女子大社会情報）・松山由香・竹村哲雄（東京理科大理）・堀内一穂（弘前大学理工）・高松信樹（東邦大理）・河合崇欣（名古屋大院環境）	モンゴル・フスグル湖の堆積物中の有機成分による最終氷期以降の環境変動
Ratnayake Nalin・Suzuki Noriyuki・Sawada Ken（北大院理）	Implications of terrestrial biomarkers and their ¹³ C values in deep sea sediments from Bering Sea and North Pacific Ocean.
萬福真美・山中寿朗・酒井治孝（九大院比較社会文化）・堤裕昭（熊本県立大）	古カトマンズ湖堆積物における過去4万年間の有機炭素濃度・炭素同位体組成の変動
金 倫碩・片瀬隆雄・上田真吾・高 春心（日大生物資源）・川村嘉応（佐賀県水産振興セ）	有明海ノリの養殖期間における ¹⁵ N及び ¹³ Cの変動
座長 山中寿朗	
松本 公平（IFREE-JAMSTEC）・内田 昌男（MIO-JAMSTEC, WHOI）・河村 公隆（北大低温研）・柴田 康行・森田 昌敏（国立環境研）	表層土壌中の個別脂肪酸の炭素 ¹⁴ C年代
新村龍也・沢田健・鈴木徳行（北大院理）	鮮新世の海生哺乳類化石に含まれるステロイドとその炭素同位体比
早川和秀（琵琶湖研）	湖水中の溶存炭水化合物の分布とその微生物分解性
荒井高明・沢田健・鈴木徳行（北大院理）・塚腰実（大阪市立自然史博物館）	新第三系東海層群から産した植物化石硬組織体中の化学分類マーカーの探索
座長 三田肇	
力石 嘉人・山田 祐介・奈良岡 浩（都立大院理）	陸-海洋系堆積物中のステロール類の炭素・水素同位体比分布
大場 康弘・奈良岡 浩（都立大院理）	超微量低分子モノカルボン酸の分子レベル炭素・水素同位体比測定
萩原成騎（東大院理）	メタン酸化細菌と cold seep carbonate のバイオマーカー組成
三瓶良和・沢田順弘・佐藤直彦（島根大理）	岐阜県貝月山花崗岩中の炭質物
ポスター発表	
沢田健（北大院理）	北西太平洋中部日本沖における深海堆積物中の高等植物起源テルペノイド
伊澤祐輔（北大地球環境）・河村公隆・白岩孝行（北大低温研）	カムチャッカ半島・ウシュコフスキーアイスコア中の有機物
上嶋敏功・山本正伸・大場忠道・倉本敏克・南川雅男・入野智久（北大地球環境）	鹿島沖MD01-2421コアの過去14.5万年間の有機炭素量変動
山本正伸・島宗淳子・上嶋敏功・大場忠道（北大地球環境）	アルケノン古水温からみた北太平洋中緯度域の長期的ENSO様変動
白木 雄介・福島 和夫（信州大）	鹿児島県上甕島海鼠池堆積物中のバイオマーカーについて
○愿山靖子・福島和夫（信州大理）・幸田英顕（名古屋大院環境）	様々な環境下の湖沼水中溶存高分子量有機物の化学的特性
野本信也・川添菜津子（筑波大）・小園正樹（産総研）・三田肇（筑波大）・下山晃（高知短大）・木越英夫（筑波大）	堆積岩のクロム酸化で得られるフタルイミド類の光合成生物指標としての意義
Svetlana Yessalina・Noriyuki Suzuki・Takuya Yoshida（北大院理）	Aromatic oleanoids in Cretaceous to Tertiary sediments from Northeast Japan

8月5日(火曜日)

口頭発表	
座長 小田浩	
三田 肇・野本 信也(筑波大化)・寺崎 正紀(筑波大化, 現環境研)・下山 晃(筑波大化現高知学園短大)・山本泰彦(筑波大化)	前生物的に合成されたアミノ酸オリゴマーの質量分析法による解析
鈴木 彌生子・奈良岡 浩(都立大院化)・山中 寿郎(九大)	深海熱水噴出孔環境における脂肪酸の炭素・水素同位体比分布
金子信行・猪狩俊一郎・前川竜男(産総研)・持丸華子(筑波大院)・鎌形洋一(産総研)	諏訪湖ガス田天然ガスの地球化学 湖成堆積物からのメタン生成
相澤武宏(弘前大理工)・氏家良博(弘前大理工)	青森県鯖石における中新統泥岩の接触変成による有機熟成
早稲田 周・岩野 裕継(石油資源技研)	ヘッドスペースガス分析からみた炭化水素の生成・移動・集積
座長 吉岡秀佳	
奥井明彦、中水勝(石油公団TRC)	三次元ベースンモデルSIGMA-3Dによるメタンハイドレート鉱床形成シミュレーションの試み
小田 浩・鈴木祐一郎(産総研)・金子光好・門澤伸昭(ジャパンエナジー石開)	北海道釧路炭田の含炭第三系地質と炭質解析
高橋一晴(核燃料サイクル幌延セ)・守屋俊文(日鉄鉱コンサル)・福島龍朗(核燃料サイクル望月誠)・村江達士(九大・理)	北海道幌延町における研究所設置地区の新第三系層序及び有機地球化学的特徴 顕微ATR/FT-IRの石炭組織分析への応用の試み
ポスター発表	
大村 亜希子(産総研海洋)・保柳 康一(信州大理)	電子顕微鏡観察によるアモルファス有機物の形態的特徴と区分
大庭 雅寛・坂田 将・鎌形 洋一・吉岡秀佳(産総研)	メタン生成菌 Methanothermobacter thermoautotrophicum 中のバイオマーカーに関する地球化学的研究
吉岡 秀佳・坂田 将・鎌形 洋一(産総研)	微生物によるメタン生成に伴う同位体分別分析法の開発
西田 英毅・早稲田 周・小布施 明子・武田信従(石油資源技研)	北海道松前半島に分布する中新統吉岡層黒色頁岩の有機地球化学
武田信従・西田秀毅・浜田康史・Larry Carbonel (First Expl. Develop. Serv)	海上油徴のサンプリングと分析
齋藤 裕之・鈴木 徳行・沢田 健(北大院理)	南海トラフのガスハイドレート形成を支配する堆積有機物タイプ ODP Leg 190 の例
鈴木祐一郎・猪狩俊一郎・前川竜男(産総研)・山口政美(住友石炭)	石狩炭田赤平地区のコールベッドメタンの有機地球化学的特徴とその起源
猪狩俊一郎・前川竜男・坂田将(産総研)	日本の地熱ガス中の炭化水素と天然ガス中の炭化水素の比較
奥井明彦(出光オイルアンドガス開発)・木佐森聖樹(出光興産中央研)	ダイヤモンドイド化合物によるコンデンセート根源岩の推定

第4回(2003年度)日本有機地球化学会有機地球化学賞(学術賞) 受賞者決まる

第4回日本有機地球化学会有機地球化学賞(学術賞)は選考委員会で審議された後、8月3日に行われた運営委員会において、氏家良博会員に与えられることが決まった。4日の総会において、石渡会長より同賞が授与された。

有機地球化学賞(学術賞)第5号

氏家 良博 会員

受賞題目:「有機熟成度指標 stTAI の提唱とその地質学への適用に関する研究」

氏家良博氏の提唱した stTAI は、泥岩中に含まれるマツ属、マキ属、モミ属、トウヒ属などの有翼型花粉の明度をデジタル変換した顕微鏡画像上で測定し、その明度の最頻値を統計的に処理する手法である。この画像処理の手法によって、従来の TAI の欠点が改良され、客観的・定量的測定が可能になった。この手法と指標は Organic Geochemistry 誌に掲載されるとともに、石油技術協会誌等に公表された地質試料への応用例によって有効な熟成指標であることが示されている。最近では現生花粉や孢子の加熱実験から有機熟成のシミュレーションを行い、より鋭敏な熟成変化をビトリナイト反射率、元素組成、無機鉱物と共に stTAI を使って総合的に解明することにも成功し、それらの成果は AAPG、



学術賞授与の様子 2003年8月5日

Geochemical Journal、地球科学などの学術誌に掲載されている。このようにこれらの一連の研究は国内外で高く評価されている。さらに同氏は長年にわたり有機地球化学の分野で活躍し、この分野で多数の研究論文や著書も著している。以上の理由により、選考委員会は同氏を有機地球化学賞の受賞者に相応しいものと判断した。

(有機地球化学賞(学術賞)受賞候補者選考委員会:下山 晃、河村公隆、鈴木徳行、武田信従、福島和夫)

2003年度 第2回日本有機地球化学会運営委員会報告

日時:2003年8月3日 16:00~19:00
場所:北海道札幌市 北海道大学 理学部 6号館 11F 地球惑星科学専攻(物質科学分野)会議室

出席者:(会長)石渡良志、(副会長)福島和夫、
(運営委員)氏家義博、奥井明彦、鈴木徳行、
鈴木祐一郎、田上英一郎、武田信従、奈良岡浩、
村江達士
下山 晃(学術賞候補者選考委員長)
山本正伸(30周年記念事業WG委員長)

<議長-石渡会長 書記-河野和子>

議事1. 2002年度事業・会計報告

➢鈴木徳行事務局長により2002年度事業・会計報告が行われ、関連資料の総会への提出を承

認した。

議事2. 2003年度事業・会計中間報告

➢鈴木徳行事務局長により2003年度事業・会計中間報告が行われ、関連資料の総会への提出を承認した。

議事3. 研究奨励賞(田口賞) 有機地球化学賞(学術賞)専攻結果の報告と承認

➢研究奨励賞(田口賞)について氏家良博委員長より、有機地球化学賞(学術賞)について下山晃委員長より選考結果報告があり、それぞれ以下のように承認された。
➢研究奨励賞(田口賞)については、期限内に応募がなく、締め切りの延期をニュースレターにて行うはずが連絡不足でうまく伝わらなかったため、そのまま「応募者なし、該当者

なし」で不選出とした。

- 学術賞は氏家良博会員（弘前大学）が受賞、研究題目は「有機熟成度指標 stTAI の提唱とその地質学への適用に関する研究」
- 研究奨励賞（田口賞）募集締め切りの延期は今後行わない、また、有機地球化学賞（学術賞）の募集締め切りの延期は告知記事がニュースレターの発行に間に合わない限り行わないこととした。また、田口賞選考委員、学術賞選考委員、ニュースレター編集委員、運営委員および事務局間の連絡をこれまで以上に密にしていくこと、このような告知、案内等の連絡に会員メーリングリストをよりいっそう活用していくことなどが話し合われた。

議事 4. 2004-2005 年度の学会運営について

- 2004 年度事業・会計計画について鈴木徳行事務局長が説明、一部資料を修正して総会に提出することを承認した。
- 会長、副会長、運営委員、監事の改選について、石渡良志会長より提案があり、以下のように総会に提案することで承認された。

会長 福島和夫

副会長 武田信従

運営委員 氏家良博、荻原成騎、河村公隆、三瓶良和、鈴木徳行、高田秀重、田上英一郎、奈良岡浩、村江達士、山本正伸（以上 10 名）

監事 山本修一

- 運営委員残り二名については新会長一任として総会に提案することで承認された。（後日、新会長により、奥井明彦会員、坂田 将会員の二氏が指名され運営委員となった。）
- 学術賞選考委員（5 名）の改選について、以下のように承認された。
武田信従（委員長）、氏家良博、鈴木徳行、福島和夫、河村公隆
- 田口賞選考委員（5 名）の改選について以下のように承認された。
田上英一郎（委員長）、奥井明彦、坂田 将、高田秀重、奈良岡 浩
- ROG 編集委員長・編集委員の改選について以下のように承認された。
奈良岡 浩（委員長）、河村公隆、三瓶良和、鈴木徳行、高田秀重

- ニュースレター編集委員（2 名）の改選について事務局より提案があり、以下のように承認された。
古宮正利、早川和秀

議事 5. 2004-2005 年度の事業について

- 2004 年度以降の事業内容について、以下のことを総会に提案することを承認した。
- 1. 第 22 回有機地球化学シンポジウム（2004 年）について、東京 大妻女子大学（代表者 井上源喜）での開催をお願いする。
- 2. メール会議の記録は議事録として公表することを確認した。
- 3. 退職、退官に伴う退会希望や会員期間が長い会員の退会希望の場合に名誉会員制度として登録する制度などについて話し合われた。

議事 6. 30 周年記念事業について

- ROG 表紙刷新については、現在募集を受け付け中であることは HP でもニュースレターでも公表しており、来年発行の ROG に必ず間に合うように準備していくことを確認し、総会で改めて紹介することを承認した。
- 地球・環境有機分子検索マニュアル作成 WG について、山本正伸委員長より今までの活動の経緯について報告があり、以下のことを総会で提案することを承認した。
- 1. 30 周年記念事業の一環として「地球・環境有機分子検索マニュアル」を作成、発行することとし、WG が発足。メンバーは山本正伸（委員長）石渡良志、福島和夫、山本修一、有信哲哉、近藤 寛（未定）。オブザーバーとして鈴木徳行。
- 2. マニュアルの内容について、メール会議にて意見交換を行った。出された構想について公表したうえで会員にアンケートを実施し、要望をまとめ、データの提供について協力、援助をお願いする。

事務局による追記事項（電子会議で報告済み）

- 学術刊行物の指定について
平成 15 年 4 月 7 日付けで ROG が日本学術会議により学術刊行物として指定された。それにともない、第 4 種郵便物として送付することができることとなった。

2003 年度総会記事

表記の総会が 2003 年 8 月 3 日北海道大学百年記念会館において、鈴木祐一郎会員を議長に選出して、開催された。総会では以下の事項が審議あるいは承認された。

（事業・会計報告および計画）

- 2002 年度事業・会計報告（2002 年 1 月 1 日～2002 年 12 月 31 日）

・事業報告

ニュースレターNo.35 (2002.5.24), No.36 (2002.12.25) 発行
 ROG Vol. 17 発行 (2002.6)
 ROG 編集委員会・田口賞受賞候補者選考委員会 (2002.8.1; 於産総研)
 学術賞受賞候補者選考委員会 (2002.8.1; 於産総研)
 運営委員会 (2002.8.1; 於産総研)
 総会 (2002.8.1; 於産総研)
 第20回有機地球化学シンポジウム (2002.8.1~8.2; 於産総研)
 ホームページの改訂

・会計報告

一般会計

収入の部 (円)		支出の部 (円)	
前年度繰越金	1,096,052	ROG 印刷費 (振込手数料込)	399,000
会費 (賛助)	120,000	郵送料	44,180
会費 (個人)	262,000	ホームページ作成	68,250
ROG 収入	127,795	雑費	43,142
利息他	191	次年度繰越金	1,051,466
計	1,606,038	計	1,606,038

田口基金

収入の部 (円)		支出の部 (円)	
前年度繰越金	2,033,374	副賞	50,000
利息	52	次年度繰越金	1,983,426
計	2,033,426	計	2,033,426

会計監査報告

有機地球化学研究会および田口基金の2002年度会計報告を、出納簿、領収書、郵便料金受領証、その他提示された証明書類に基づいて審査した結果、それが正確に処理されていると認められたので、ここに報告致します。

平成15年3月24日

監事 山本 修一 (印)

➤ 2003年度事業・会計中間報告および今後の計画

・事業中間報告 (2003年1月1日~2002年8月5日)

ニュースレターNo.37 発行 (2003.6.2)
 30周年記念事業 (マニュアル作成) WG の発足
 ROG 編集委員会 (於北大)
 田口賞受賞候補者選考委員会 (2003; 於北大)
 学術賞受賞候補者選考委員会 (2003; 於北大)
 運営委員会 (2003.8.3; 於北大)
 総会 (2003.8.4; 於北大)
 第21回有機地球化学シンポジウム (2002.8.4~8.5; 於北大)

・今後の計画 (2003年8月6日~2003年12月31日)

ROG Vol.18 発行
 ニュースレターNo.38 発行

・一般会計中間報告 (2003年1月1日~2003年7月31日)

一般会計

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	1,051,466	送料	14,010
賛助会費	0	雑費	3,376
個人会費	120,000	残高	1,162,658
ROG 収入 (ROG・論文集)	8,540		
利息	38		
計	1,180,044	計	1,180,044

・今後の一般会計計画（2003年8月1日～2003年12月31日）

一般会計		一般会計	
収入の部		支出の部	
前期繰越金	1,162,658	ROG 印刷費	400,000
会費（個人）	120,000	郵送料	15,000
会費（賛助）	142,000	オンライン化経費	30,000
ROG 販売	2,000	事務局経費	30,000
ROG ページチャージ	20,000	雑費	3,000
利息	50	次年度繰越金	968,708
計	1,446,708	計	1,446,708

田口基金		田口基金	
収入の部		支出の部	
前年度繰越金	1,983,426	副賞	8,000
利息	52	前年度繰越金	1,975,478
計	1,983,478	計	1,983,478

➤ 2004年度事業・会計計画（2004年1月1日～2004年12月31日）

・事業計画

ROG Vol. 19 発行

ROG 編集委員会・田口賞受賞候補者選考委員会

学術賞受賞候補者選考委員会

運営委員会

第22回有機地球化学シンポジウム

総会

ニュースレター発行

地球・環境有機分子検索マニュアル（仮称）WG

・会計計画

一般会計

一般会計		一般会計	
収入の部		支出の部	
前年度繰越金	968,708	ROG 製作	400,000
会費（個人）	262,000	郵送料（第四種郵便化）	35,000
会費（賛助）	120,000	事務局謝金	30,000
ROG 収入	2,000	オンライン化経費	30,000
ROG ページ超過	20,000	雑費	5,000
利息	50	次年度繰越金	872,758
計	1,372,758	計	1,372,758

全会一致で承認された。

会員現況

入会（2002.7.30～2003.7.31）

（学生会員）石崎 維、新村龍也、菅家博英、天羽美紀、増田香理、萬福真美、相澤武宏、上嶋敏功、荒井高明

（一般会員）小園正樹、大村亜希子、大庭雅寛

（賛助会員）サーモエレクトロン株式会社

退会（2002.7.30～2003.7.31）

（一般会員）小倉紀雄、湯浅精二、二階堂要

現在の会員数は143名（一般会員121名，学生会員18名，賛助会員4社）（2003.7.31現在）

委員長 山本 正伸

経緯

2003年1月 事務局より以下の提案があった。
「有機地球化学が対象としている試料から得た各種有機化合物の各種スペクトル集(モノグラフ)(NISTにないもの)をROG特別号として発行する。可能であれば英語版にする。以後,ROGにこのような基礎データの掲載を続け埋もれた過去の,あるいは現在の貴重なデータを生かす。本会として貢献できる事業。関与した全ての会員の業績になるように配慮する。特別号は有料で広く販売する。」

2003年6月 上記提案の実現化にむけて,山本正伸を委員長とする企画ワーキンググループ(WG)を設置することが運営委員会(電子メール会議)において決定された。

2003年7月 山本正伸,福島和夫,石渡良志,山本修一,有信哲哉で構成されるWGが組織された,企画案作成にむけて電子メール会議を行った。

2003年8月 運営委員会および総会において進行状況を報告。会員にアンケートを実施した。上記企画に関して,企画WGにおいて意見交換をした結果,以下のような構想が出てきた。

名称

「地球・環境有機分子検索マニュアル(仮称)」

作成目的

有機化合物の分析・同定のために必要な情報を検索しやすい形でとりまとめ,出版することにより,有機地球化学研究推進に資する。

利用者

有機地球化学会会員がコア利用者。それ以外に範囲をどこまで広げるのか?国内だけか海外も含めるか?地質学関係、古海洋、環境科学、海洋科学、水圏科学で有機物に関心を持つ,あるいは取り扱う可能性がある人や初心者に広げるか?今後の検討課題とする。

出版の形態

冊子とCDの両方を検討中。冊子(モノグラフ):たとえば以下のような体裁

はじめに(化合物の説明,研究経緯など),分析方法(抽出,分離,機器条件),ガスクロマトグラム,化合物一覧表,質量スペクトル,おもなフラグメントイオン,参考文献,CD:主に質量スペクトルを編集。市販解析ソフトで検索できるようにする。

対象とする化合物

現世堆積物に含まれる天然化合物・人為起源化合物

地質時代堆積物に含まれる天然化合物

化石燃料(石油・石炭)に含まれる天然化合物

大気エアロゾル中に含まれる天然化合物・人為起源化合物

海水中に含まれる天然化合物・人為起源化合物

陸水中に含まれる天然化合物・人為起源化合物

生物中に含まれるバイオマーカー前駆体

隕石中に含まれる有機化合物など

*生物中に含まれる有機分子に関しては膨大なデータが存在するが,それをどこまで整理して含めるのか?今後の検討課題である。

データソース

執筆者の手持ちのデータのみを用いるか,何人かの執筆者がデータを持ち寄るか。文献に記載されているものも編集するか?さまざま考えられる。今後の検討が必要である。

出版費用

研究会予算,科研費(平成16年度~),分析機器メーカーから援助金などの可能性があげられている。

頒布方法

有料で販売。無料で配布。など。要検討

今後の予定

運営委員会での検討,シンポジウムでのアンケートから,本事業の趣旨に関しては学会記念事業にふさわしいと賛同のご意見をいただいた。しかし,実施方法に関しては様々な意見がある。WGでは寄せられた意見を参考に,今後,具体的な「企画案」を作成し,運営委員会での議を経て,実施に移る予定にしている。

ご意見がありましたら,下記宛でお送りください。お待ちしております。

「マニュアル作成WG」連絡先:山本正伸(myama@ees.hokudai.ac.jp)

有機地球化学賞(学術賞)2004 年度受賞候補者推薦の募集

有機地球化学賞(学術賞)2004 年度受賞候補 選考委員会 委員長 武田 信従

有機地球化学賞(学術賞)受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を受け付けます。つきましては、下記をご参照のうえ受賞候補者をご推薦下さい。

記

候補者の資格：有機地球化学分野で顕著な
学術業績をあげた本会会員。

推薦方法：本会会員による推薦
(自薦他薦を問いません)

推薦書類：下記の項目について A4 サイズの
用紙に任意の形式で記入。

- 1) 候補者の履歴書
(学歴、大学卒から；職歴；その他)
- 2) 推薦の対象となる研究題目及びその推薦理由
- 3) 研究業績目録
(推薦の対象となる主要な論文 10 編)
- 4) 推薦者氏名、連絡先
締切日：2004 年 5 月 31 日(月)(当日消印有効)
提出及び問い合わせ先：
日本有機地球化学会事務局 気付 武田信従

研究奨励賞(田口賞)2004 年度受賞候補者の募集

研究奨励賞(田口賞)2004 年度受賞候補 選考委員会 委員長 田上 英一郎

研究奨励賞(田口賞)受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照のうえ受賞候補者をご推薦下さい。

記

候補者の資格：生年月日が 1970 年 4 月 2 日以
降で、有機地球化学、石油地質学、堆積学の 3
分野のいずれかで優れた研究を行い、将来にも
研究の発展を期待できる方。本会会員に限りま
せん。

募集方法：本会会員の推薦による。自薦他薦
は問いません。

推薦方法：下記の事項を A4 サイズの用紙に

記入し、書留で郵送すること。記入の様式は自
由。

- 1) 推薦理由および研究題目
- 2) 研究業績目録
- 3) 研究論文の別刷り又はコピー
- 4) 推薦者の氏名と連絡先

締切日：2004 年 5 月 31 日(月)(当日消印有効)
提出及び問い合わせ先：
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学
専攻
田上英一郎
電話：052-789-3472・FAX：052-789-3436
E-mail: tanoue@ihas.nagoya-u.ac.jp

Researches in Organic Geochemistry 投稿の募集

Researches in Organic Geochemistry 編集委員長 奈良岡 浩

日本有機地球化学会々員のみなさま、
先の札幌シンポジウムでこれからしばらくの間、
Researches in Organic Geochemistry (ROG) 編集
を仰せつかりました都立大・奈良岡です。

これから ROG が日本有機地球化学会学会誌と
して発展するよう微力ながら力を注いでいきたいと
思っています。学会員のみなさまにもご協力のほど
お願いいたします。

早速ですが、例年、ROG への投稿数が少ないこ
とが発行を遅らせる原因となっています。今年のシ
ンポジウムも終了しましたので、シンポジウム発表内
容も含めて、ROG Vol.18 への投稿をお願いします。
製本可能になり次第発行いたしますが、発行が遅
れる場合でも審査・受理証明は早く進めていきま
す。

ROG Vol.18 から投稿規定における送付方法を
若干変更し、PDF ファイルによる投稿も受け付けま
す。

投稿規定7. 原稿の部数と送り先について以下のように変更します。

「投稿に際しては、原稿のオリジナルとコピー2部、または原稿の PDF ファイルを編集委員長宛に送付する。尚、審査後の最終原稿はオリジナル1部とコンピューターファイルにてテキストと図表を提出する。」

投稿先: 奈良岡浩

東京都立大学大学院理学研究科

〒192-0397 八王子市南大沢 1-1

Tel: 0426-77-1111 内線 3437

Fax: 0426-77-2525

E-mail: naraoka-hiroshi@c.metro-u.ac.jp

投稿規定は Researches in Organic Geochemistry の巻末に掲載されています。

People

恒例の若手・ポストク・院生会員の紹介コーナー「People」です。今回は、本企画初の女性研究者です。

Going around my Postdoc journey

東京都立大学理学部化学科
学振特別研究員 (PD) 藪田ひかる

ようやく社会人として研究生活を始動してから1年が過ぎました。29歳となった今でも学生と間違えられるのは良いことなのかどうなのか、いまだに大学のサークルに勧誘されたり、警備員さんに学内駐車を抑えられたりしながらも(注: 駐車違反ではないです)、研究室へ日々元気に通勤しております。

私は大学4年から博士課程修了まで、筑波大学化学系・下山晃教授(現: 高知学園短期大学学長)の指導の下、堆積岩中のシクロアルカンに関する研究を行っていました。それまでは単環・二環式の低分子量シクロアルカンの堆積岩からの検出報告は稀有であったこともあり、百種近くの新たな分子の存在を自分の手で明らかにしていくことに、面白さとやりがいを覚えていきました。新庄新第三系堆積岩からは、続成変化の進行に伴うシクロアルカン分布の連続的な変化を明らかにし、各分子の生成について検討しました。川流布白亜紀/第三紀(K/T)境界堆積岩からはダイヤモンド炭化水素(アダマンタン、ジアママンタン類)や、ステラン・ホパンの同定も併せて行い、生物大量絶滅に伴うシクロアルカンの分布特徴を見出し、各分子の起源について考察を深めました。

昨年3月に博士の学位取得後、同年6~8月までは、神奈川県三浦半島の葉山にある総合研究大学院大学(総研大)教育研究交流センターとつくばの高エネルギー加速器研究機構を歩き来しながら、湯川哲之教授と共同で、原始大気環境を模したアミノ酸の化学進化的生成の研究立ち上げに携わりました。たった3ヶ月間でしたが、学問分野の枠を越えた独創的学術研究の開

拓・推進を目指す総研大の斬新さに触れ、しかも大学から海が目の前という素晴らしく魅力的な環境で勤務できたことは、とても幸運だったと思っています。

翌月からは、つくばの産業技術総合研究所(産総研)環境管理研究部門の福嶋正巳主任研究員の下で、本格的なポストク生活が始まりました。土壌中での有機汚染物質の挙動解明の為に、簡便で迅速な分析技術開発を目的とし、固相マイクロ抽出法(SPME)を適用した、腐植物質に対する有機塩素化合物の分配係数評価の研究を行いました。ここでの生活を通して、学術的研究とはまた別の、人の生活に直接還元できる研究の面白さ、ミッション達成後の充実感を味わうことができました。また私が所属していたグループには、国際協力機構(JICA)を通して海外各国から短期研修に来る人達が多く、そういう人達と交流するのがものすごく楽しかったですし、時に私達がないがしろにしがちな、仕事と私生活のメリハリや、人への深みある温かさも彼女達から学びました。

そして今年4月から、東京都立大学理学部の奈良岡浩助教授の下で、私の一番の希望であった隕石有機物の研究を始めて現在に至っています。近年では、有機地球化学で大活躍の分子レベル安定炭素・水素同位体比分析法が有機“宇宙”化学においても高い貢献を成し、隕石中の個々の有機分子が地球外のどこで、どのような反応機構で生成したかについて議論できる段階まで発展してきています。さらに、今年5月に日本から打ち上げられた小惑星サンプルリターン衛星(MUSES-C)のように、近い将来には隕石以外の地球外物質も研究対象として回収できるようになれば、より僅かな量の試料でも分析可能である技術が必要となります。このような背景から、『隕石有機物の同位体的キャラクタリ

ゼーションと分析技術開発』が当面の私の課題です。

学生時代を含めた今日までの、研究活動を軸とした生活の間で、自分のエネルギーの糧は、月並みな言い方になりますが、やっぱり友達存在です。心にいてくれるから、頑張れる、楽しめる、というありがたみをいつも強く感じています。幾つかの職場を転々としたこの1年だけでも、素敵な出逢いが数多くあり、自分はこの点でも恵まれているなあと思います。

来年4月からは1年間、アメリカ合衆国アリゾナ州立大学にて、Sandra Pizzarello 教授と共同で隕石有機物の研究を行う予定です。まだまだサバイバーな身ですが、研究も人との触れ合い

も、両方楽しみたいと思っています。



今年10月に撮ったプリクラです。産総研時代に親しくなったアルゼンチンの友人の、友人(写真右下。私はその隣)と。後ろの2人はペルー人(左)とボリビア人(右)。最近は南米系スペイン語も独学中です。

編集後記：この企画も初の女性研究者が登場しました。これからは大学院生や自称若手(?)の方もどんどん登場させていきたいと思います。我こそはという方の寄稿をお待ちしております。(編集)

2004 年年会費納入のお願い

会員の皆様には日頃よりご支援いただき、誠にありがとうございます。事務局から2004年の年会費の納入についてご協力をお願いいたします。年会費は一般会員2000円、学生会員1000円となっております。下記郵便口座までお払い込みをお願いいたします。ご自分の最終納入年度がわからない等ご不明の点がございましたら、どうぞ遠慮なく事務局までお問い合わせください。新しい年になりましても当学会へのご支援

ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

また、職場や自宅を移動された方は名簿作成と郵便物配布のために新しいご住所、電話番号、ファックス番号を下記までご連絡下さい。また、E-mail アドレスをお持ちの方は、ニュースレターのメール配信のため、差し支えない限りE-mail アドレスを事務局までお知らせいただくようお願いいたします。

発行責任者 有機地球化学会会長 福島 和夫

〒390-8621 長野県松本市旭 3-1-1 信州大学理学部物質循環学科

Phone: 0263-37-2502, Fax: 0263-37-2560, e-mail: kfukush@gipac.shinshu-u.ac.jp

有機地球化学会事務局

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

北海道大学 大学院理学研究科 地球惑星科学専攻内

有機地球化学会事務局

Phone&FAX: 011-706-3683

e-mail: secretariat@ogeochem.jp (事務局員全員に配信されます)

郵便口座 00110-7-76406

(名義人 日本有機地球化学会)

普通口座 319-3463842 (北洋銀行北二十四条支店)

(名義人 日本有機地球化学会 鈴木德行)

編集者 古宮正利(産業技術総合研究所) 早川和秀(滋賀県琵琶湖研究所)

e-mail: news@ogeochem.jp

有機地球化学会ニュースレターはホームページでもご覧になれます。

アドレス: <http://www.ogeochem.jp/>